



法輪

—随所に主宰たれ— 宗教科

令和 2年 2月 7日 (金)

2月：伝道旬 一日暫く賓主たりとも

終身すなわちこれ仏祖

道元

永平寺という修行道場には時間などを知らせる「木板」という木の板があります。その板には、

「一日暫く賓主たりとも終身すなわちこれ仏祖」

という道元禅師様が示されたお言葉が書かれております。その意味は「今の出会いが例え賓主（＝もてなす人とお客様の関係。対等ではない関係の意）であっても、元々はお互いに仏さまや祖師様として拝み拝まれる存在である」というものです。

現代風に解釈すれば、「**肩書の上では対等の立場になくても、関わる相手は己を高める尊い存在であることを肝に銘じ接しなさい。**」となります。

本山などの修行道場では、一日でも早く修行道場に入門したものが、その人の年齢や能力に関係なく先輩になります。特に修行道場では、先輩の言うことは絶対で、後輩は「はい」と「いいえ」しか言うてはなりません。また、自分の意見や感情を出したりすることはもってのほかで、最初は先輩の目を見ることすら許されないので。しかしながら、それをいいことに自分の方が先輩なのだとおごりの気持ちを持ったり、威張って後輩に接していたならば他の修行僧たちから嫌われ、同期や後輩にも相手にされなくなってしまいま

す。そんな修行僧を私は何人も見てきました。また、本山の修行を無事に終えてから何十年たってからでもその時のいやな思いをずっと引きずっていると昔話によくあがります。

平成五年に私が永平寺に入った時の同期に、年齢は私よりも十年も年上の方がいらっしゃいました。その方は大学を卒業し、一度就職をしたのですが、どうしてもお坊さんになりたいと一大決心し、修行に来られた方でした。

自分よりもずっと年下の修行僧にもおごることなく兄のように優しく接し、自分よりも年下の先輩から厳しく指導された時も素直に受け入れ、腹を立てることなく黙々と修行されていました。

年齢という肩書に囚われない謙虚さから生まれる言動は、修行僧の中で一目置かれる存在となり、いつしか憧れとなりました。

皆さんも普段の生活の中で、特に部活動などでは、先輩後輩の関係が厳しいことでしょうか。その関係性の中で相手を尊べないことはありませんか。例えば後輩が自分よりも優秀だからこそ生意気に思えたり、逆にアナタが先輩より優秀であると感じ小馬鹿にしてしまったりすることです。

優劣がつくものに目を向ければ上下が生じるのは当たり前です。ただそれは人としてどっちが偉いとか、どっちがだめだということではありません。社会に出れば年齢に囚われず同じ目標に向かって活動することばかりです。そのときお互いを素晴らしい存在と考えることができなければ何も上手く回りません。

関わる人はみな同じ人間として、同じ仏様の御子として尊重していかなければなりません。それは、道元禅師様がおっしゃる修行の心構えなのです。皆さんも学校という修行道場で研鑽を積んでいるわけですので、この言葉が持つ考え方を大切にしてほしいです。

私が心の片隅に置く大切を言葉を紹介させていただきました。